谷崎潤一郎文庫

痴人の愛

卍 まんじ

六興出版

谷崎潤一郎文庫　八八〇円
第七巻　痴人の愛・卍
昭和四十八年六月十五日　発行

著者　谷崎潤一郎
発行者　吉川文子
印刷　大日本法令印刷
製本　手塚製本
発行所　六興出版
東京都文京区水道二―九―二
郵便番号　一一二
電話〇三(九四三)三四三一
振替　東京　九二四四八

© 1973　MATSUKO TANIZAKI,　Printed in Japan
落丁・乱丁の本はお取り替え致します

0393-02407-9216

目次

痴人の愛　三
卍　二〇九
注解　三四五
解説　三五五

監

修

谷崎松子

野村尚吾

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

痴人の愛

一

私はこれから、あまり世間に類例がないだろうと思われる私達夫婦の間柄に就いて、できるだけ正直に、ざっくばらんに、ありのままの事実を書いて見ようと思います。それは私自身に取って忘れがたない貴い記録であると同時に、おそらくは読者諸君に取っても、きっと何かの参考資料となるに違いない。殊にこの頃のように日本もだんだん国際的に顔が広くなって来て、内地人と外国人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入って来る、男は勿論女もどしどしハイカラになる、というような時勢になって来ると、今まではあまり類例のなかった私たちの如き夫婦関係も、追い追い諸方に生じるだろうと思われますから。考えて見ると、私たち夫婦はすでにその成り立ちから変っていました。私が始めて現在の私の妻に会ったのは、ちょうど足かけ八年前のことになります。もっとも何月の何日だったか、委しいことは覚えていませんが、とにかくその時分、彼女は浅草の雷門の近くにあるカフェエ・ダイヤモンドという店の、給仕女をしていたのです。彼女の歳はやっと数え歳の十五でした。だから私が知った時はまだそのカフェエへ奉公に来たばかりの、ほんの新米だったので、一人前の女給ではなく、それの見習い、――まあ云って見れば、ウェイトレスの卵に過ぎなかったのです。そんな子供をもうその時は二十八にもなっていた私が何で眼をつけたかというと、それは自分でもハッキリとは分りませんが、多分最初は、その児の名前が気に入ったからなのでしょう。彼女はみんなから「直ちゃん」と呼ばれていましたけれど、あるとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美というのでした。この「奈緒美」という名前が、大変私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、NAOMI と書くとまるで西洋人のようだ、と、そう思ったのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議なもので名前がハイカラだとなると、顔だちなどもどこか西洋人臭く、そうして大そう悧巧そうに見え、「こんな所の女給にしておくのは惜しいもんだ」と考えるようになったのです。実際ナオミの顔だちは、（断っておきますが、私はこれから彼女の名前を片仮名で書くことにします。どうもそうしないと感じが出ないのです）活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあって、たしかに西洋人じみていました。これは決して私のひいき眼ではありません。私の妻と

なっている現在でも多くの人がそう云うのですから、事実に違いないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素っ裸にして見ると、その体つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になってから分ったことで、その時分には私もそこまでは知りませんでした。ただおぼろげに、きっとああいうスタイルなら手足の恰好も悪くはなかろうと、着物の着こなし工合から想像していただけでした。

一体十五六の少女の気持ちというものは、肉親の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフェエにいた頃のナオミの性質がどんなだったかと云われると、どうも私には明瞭な答えができません。おそらくナオミ自身にしたって、あの頃はただ何事も夢中で過したと云うだけでしょう。が、ハタから見た感じを云えば、孰方かというと、陰鬱な、無口な児のように思えました。顔色なども少し青みを帯びていて、たとえばこう、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたような、深く沈んだ色合をしていて、健康そうではありませんでした。これは一つにはまだ奉公に来たてだったので、外の女給のようにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染みがうすく、隅の方に小さくなって黙ってチョコチョコ働いていたものだから、そんな風に見えたのでしょう。そして彼女が悧巧そうに感ぜられたのも、やっぱりそのせいだったかも知れません。

ここで私は、私自身の経歴を説明しておく必要がありますが、私は当時月給百五十円を貰っている、ある電気会社の技師でした。私の生れは栃木県の宇都宮在で、国の中学校を卒業すると東京へ来て蔵前の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になったのです。そして日曜を除く外は、毎日芝口の下宿屋から大井町の会社へ通っていました。

一人で下宿住居をしていて、百五十円の月給を貰っていたのですから、私の生活はかなり楽でした。それに私は、総領息子ではありましたけれども、郷里の方の親やきょうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。というのは、実家は相当に大きく農業を営んでいて、もう父親はいませんでしたが、年老いた母親と、忠実な叔父夫婦とが、万事を切り盛りしていてくれたので、私は全く自由な境涯にあったのです。が、さればといって道楽をするのでもありませんでした。先ず模範的なサラリー・マン、――質素で、真面目で、あんまり曲がなさ過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日々の仕事を勤めている、――当時の私は

大方そんな風だったでしょう。「河合譲治君」といえば、会社の中でも「君子」という評判があったくらいですから。それで私の娯楽といったら、夕方から活動写真を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たまたま奮発して帝劇へ出かけるとか、せいぜいそんなものだったのです。もっとも私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接触することは無論嫌いではありませんでした。元来が田舎育ちの無骨者なので、人づきあいが拙く、従って異性との交際などは一つもなく、まあそのために「君子」にさせられた形だったでもありましょうが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなかなか油断なく、往来を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に対しては絶えず注意を配っていました。あたかもそういう時期に於いて、たまたまナオミという者が私の眼の前に現れて来たのです。

けれど私は、その当時、ナオミ以上の美人はないときめていたわけでは決してありません。電車の中や、帝劇の廊下や、銀座通りや、そういう場所で擦れ違う令嬢のうちには、云うまでもなくナオミ以上に美しい人が沢山あった。ナオミの器量がよくなるかどうかは将来の問題で、十五やそこらの小娘ではこれから先が楽しみでもあり、心配でもあった。ですから最初の私の計画は、とにかくこの児を引き取って世話をしてやろう。そして望みがありそうなら、大いに教育してやって、自分の妻に貰い受けても差支えない。――と、いうくらいな程度だったのです。これは一面からいうと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに単調なその日暮らしに、多少の変化を与えて見たかったからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きていたので、何とかして、この殺風景な生活に一点の色彩を添え、温かみを加えて見たいと思っていました。それにはたとい小さくとも一軒の家を構え、部屋を飾るとか、花を植えるとか、日あたりのいいヴェランダに小鳥の籠を吊るすとかして、台所の用事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだろう。そしてナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなってくれよう。と、大体そんな考えでした。

そのくらいなら、なぜ相当な所から嫁を迎えて、正式な家庭を作ろうとしなかったのか？――というと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇気がなかったのでした。これに就いては少し委しく話さなければなりませんが、一体私

は常識的な人間で、突飛なことは嫌いな方だし、できもしなかったのですけれど、しかし不思議に、結婚に対してはかなり進んだ、ハイカラな意見を持っていました。「結婚」というと世間の人は大そう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先ず第一に橋渡しというものがあって、それとなく双方の考えをあたって見る。次には「見合い」ということをする。さてその上で双方に不服がなければ改めて媒人を立て、※結納を取り交し、五荷とか、七荷とか、十三荷とか、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから輿入れ、新婚旅行、※里帰り、……と随分面倒な手続きを蹈みますが、そういうことがどうも私は嫌いでした。結婚するならもっと簡単な、自由な形式でしたいものだと考えていました。あの時分、もしも私が結婚したいなら候補者は大勢あったでしょう。田舎者ではありますけれども、体格は頑丈だし、品行は方正だし、そう云っては可笑しいが男前も普通であるし、会社の信用もあったのですから、誰でも喜んで世話をしてくれたでしょう。が、実のところ、この「世話をされる」ということがイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとい如何なる美人があっても、一度や二度の見合いでもって、お互いの意気や性質が分るはずはない。「まあ、あれならば」とか、「ちょっときれいだ」とかいうくらいな、ほんの一時の心持ちで一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことができるものじゃない。それから思えばナオミのような少女を家に引き取って、徐ろにその成長を見届けてから、気に入ったらば妻に貰うという方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しいわけではないのですから、それで沢山なのでした。のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の発育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、いわば遊びのような気分で、一軒の家に住むということは、正式の家庭を作るのとは違った、また格別な興味があるように思えました。つまり私とナオミでたわいのないままごとをする。「世帯を持つ」というようなシチ面倒臭い意味でなしに、※呑気なシンプル・ライフを送る。――――これが私の望みでした。実際今の日本の「家庭」は、やれ箪笥だとか、長火鉢だとか、座布団だとかいうものが、あるべき所に必ずなければいけなかったり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れていたり、近所隣りや親類同士の附き合いがうるさかったりするので、そのために余計な入費もかかるし、簡単に済ませることが煩雑になり、窮屈になるし、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

年の若いサラリー・マンには決して愉快なことでもなく、いいことでもありません。その点に於いて私の計画は、たしかに一種の思いつきだと信じました。

私がナオミにこのことを話したのは、始めて彼女を知ってから二た月ぐらい立った時分だったでしょう。その間、私は始終、暇さえあればカフェエ・ダイヤモンドへ行って、できるだけ彼女に親しむ機会を作ったものでした。ナオミは大変活動写真が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行ったり、その帰りにはちょっとした洋食屋だの、蕎麦屋だのへ寄ったりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたって言葉数が少い方で、嬉しいのだかつまらないのだか、いつも大概はむっつりとしています。そのくせ私が誘うときは、決して「いや」とは云いませんでした。「ええ、行ってもいいわ」と、素直に答えて、何処へでも附いて行くのでした。

一体私をどういう人間と思っているのか、どういうつもりで附いて来るのか、それは分りませんでしたが、まだほんとうの子供なので、彼女は「男」というものに疑いの眼を向けようとしない。この「伯父さん」は好きな活動へ連れて行って、ときどき御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだというだけの、極く単純な、無邪気な心持ちでいるのだろうと、私は想像していました。私にしたって、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のことは、当時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかったのです。あの時分の、淡い、夢のような月日のことを考え出すと、お伽噺の世界にでも住んでいたようで、もう一度ああいう罪のない二人になって見たいと、今でも私はそう思わずにはいられません。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね？」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、うしろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云ったものです。するとナオミは、

「いいえ、ちっとも見えないわ」

と云いながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗こうとする。

「そんなにしたって見えやしないよ、この木の上へ乗っかって、私の肩に摑まって御覧」

そう云って私は、彼女を下から押し上げてやって、高い手すりの横木の上へ腰をかけさせる。彼女は両足をぶらんぶらんさせながら、片手を私の肩にあてがって、やっと満足

したように、息を凝らして絵の方を視つめる。
「面白いかい？」
と云えば、
「面白いわ」
と云うだけで、手を叩いて愉快がったり、跳び上がって喜んだりするようなことはないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましているように、黙って、悧巧そうな眼をパッチリ開いて見物している顔つきは、よほど写真が好きなのだと頷かれました。
「ナオミちゃん、お前お腹が減ってやしないか？」
そう云っても、
「いいえ、なんにも喰べたくない」
と云うこともありますが、減っている時は遠慮なく「ええ」と云うのが常でした。そして洋食なら洋食、お蕎麦ならお蕎麦と、尋ねられればハッキリと喰べたいものを答えました。

二

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピクフォードに似ているね」
と、いつのことでしたか、ちょうどその女優の映画を見てから、帰りにとある洋食屋へ寄った晩に、それが話題に上ったことがありました。
「そう」
と云って、彼女は別にうれしそうな表情もしないで、突然そんなことを云い出した私の顔を不思議そうに見ただけでしたが、
「お前はそうは思わないかね」
と、重ねて聞くと、
「似ているかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを混血児みたいだってそう云うわよ」
と、彼女は済まして答えるのです。
「そりゃそうだろう、第一お前の名前からして変っているもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね」
「誰がつけたか知らないわ」
「お父つぁんかねおッ母さんかね、――」
「誰だか、――」
「じゃあ、ナオミちゃんのお父つぁんは何の商売をしてるんだい」
「お父つぁんはもういないの」

「おッ母さんは？」
「おッ母さんはいるけれど、――――」
「じゃ、兄弟は？」
「兄弟は大勢あるわ、兄さんだの、姉さんだの、妹だの、――――」
それから後もこんな話はたびたび出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちょっと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまうのでした。で、一緒に遊びに行くときは大概前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様のお堂の前とかで待ち合わせることにしたものですが、彼女は決して時間を違えたり、約束をすっぽかしたりしたことはありませんでした。何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう帰ってしまったかな」と、案じながら行って見ると、やはりキチンと其処に待っています。そして私の姿に気が付くと、ふいと立ち上がってつかつか此方へ歩いて来るのです。
「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待っただろう」
私がそう云うと、
「ええ、待ったわ」
と云うだけで、別に不平そうな様子もなく、怒っているらしくもないのでした。ある時などはベンチに待っている約束だったのが、急に雨が降り出したので、どうしているかと思いながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちゃんと待っていたのには、ひどくいじらしい気がしたことがありました。そういう折の彼女の服装は、多分姉さんのお譲りらしい古ぼけた銘仙の衣類を着て、めりんす友禅の帯をしめて、髪も日本風の桃割れに結い、うすくお白粉を塗っていました。そしていつでも、継ぎはあたっていましたけれど、小さな足にピッチリと篏まった、恰好のいい白足袋を穿いていました。どういうわけで休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても「内でそうしろと云うもんだから」と、彼女は相変らず委しい説明はしませんでした。
「今夜はおそくなったから、家の前まで送って上げよう」
私は再々、そう云ったこともありましたが、
「いいわ、じき近所だから独りで帰れるわ」
と云って、花屋敷の角まで来ると、きっとナオミは「さようなら」と云い捨てながら、千束町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまうのでした。

そうです、――あの頃のことをあまりくどくど記す必要はありませんが、一度私は、やや打ち解けて、彼女とゆっくり話をした折がありましたっけ。
それは何でもしとしとと春雨の降る、生暖かい四月の末の宵だったでしょう。ちょうどその晩はカフェエが暇で、大そう静かだったので、私は長いことテーブルに構えて、ちびちび酒を飲んでいました。――こう云うとひどく酒飲みのようですけれど、実は私ははなはだ下戸の方なので、時間つぶしに、女の飲むような甘いコクテルを拵えてもらって、それをホンの一と口ずつ、舐めるように啜っていたのに過ぎないのですが、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、
「ナオミちゃん、まあちょっと此処へおかけ」
と、いくらか酔った勢いでそう云いました。
「なあに」
と云って、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから敷島を出すと、すぐにマッチを擦ってくれました。
「まあ、いいだろう、此処で少うしじゃべって行っても。――今夜はあまり忙しくもなさそうだから」
「ええ、こんなことはめったにありはしないのよ」
「いつもそんなに忙しいかい？」
「忙しいわ、朝から晩まで、――本を読む暇もありゃしないわ」
「じゃあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね」
「ええ、好きだわ」
「一体どんなものを読むのさ」
「いろいろな雑誌を見るわ、読むものなら何でもいいの」
「そりゃ感心だ、そんなに本が読みたかったら、女学校へでも行けばいいのに」
私はわざとそう云って、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癪に触ったのか、つんと済まして、あらぬ方角をじっと視つめているようでしたが、その眼の中には、明らかに悲しいような、遣る瀬ないような色が浮かんでいるのでした。
「どうだね、ナオミちゃん、ほんとうにお前、学問をしたい気があるかね。あるなら僕が習わせて上げてもいいけれど」
それでも彼女が黙っていますから、私は今度は慰めるような口調で云いました。
「え？　ナオミちゃん、黙っていないで何とかお云いよ。

お前は何をやりたいんだい。何が習って見たいんだい？」
「あたし、英語が習いたいわ」
「ふん、英語と、――――それだけ？」
「それから音楽もやってみたいの」
「じゃ、僕が月謝を出してやるから、習いに行ったらいいじゃないか」
「だって女学校へ上がるのには遅過ぎるわ。もう十五なんですもの」
「なあに、男と違って女は十五でも遅くはないさ。それとも英語と音楽だけなら、女学校へ行かないだって、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前真面目にやる気があるかい？」
「あるにはあるけれど、――――じゃ、ほんとうにやらしてくれる？」
そう云ってナオミは、私の眼の中をにわかにハッキリ見すえました。
「ああ、ほんとうとも。だがナオミちゃん、もしそうなればここに奉公しているわけには行かなくなるが、お前の方はそれで差支えないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引き取って世話をしてみてもいいんだけれど。……そうしてどこまでも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思うんだけれど」
「ええ、いいわ、そうしてくれれば」
何の躊躇するところもなく、言下に答えたキッパリとした彼女の返辞に、私は多少の驚きを感じないではいられませんでした。
「じゃ、奉公を止めるというのかい？」
「ええ、止めるわ」
「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしたって、おッ母さんや兄さんが何と云うか、家の都合を聞いて見なけりゃならないだろうが」
「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だわ。誰も何とも云う者はありゃしないの」
と、口ではそう云っていたものの、その実彼女がそれを案外気にしていたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのがいやさに、わざと何でもないような素振りを見せていたのです。私もそんなにいやがるものを無理に知りたくはないのでしたが、しかし彼女の希望を実現させるためには、やはりどうしても家庭を訪れて彼女の母なり兄なりに篤と相談をしなけれ

ばならない。で、二人の間にその後だんだん話が進行するに従い、「一遍お前の身内の人に会わしてくれろ」と、何度もそう云ったのですけれど、彼女は不思議に喜ばないで、「いいのよ、会ってくれないでも。あたし自分で話をするわ」

と、そう云うのが極まり文句でした。

私はここで、今では私の妻となっている彼女のために、「河合夫人」の名誉のために、強いて彼女の不機嫌を買ってまで、当時のナオミの身許や素性を洗い立てる必要はありませんから、なるべくそれには触れないことにしておきましょう。後で自然と分って来る時もありましょうし、そうでないまでも彼女の家が千束町にあったこと、十五の歳にカフェエの女給に出されていたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようとしなかったことなどを考えれば、おおよそどんな家庭であったかは誰にも想像がつくはずですから。いや、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに会ったのですが、彼等はほとんど自分の娘や妹の貞操ということに就いては、問題にしていないのでした。私が彼等に持ちかけた相談というのは、折角当人も学問が好きだと云うし、あんな所に長く奉公させておくのも惜しい児のように思うから、其方でお差支えがないのなら、どうか私に身柄を預けては下さるまいか。どうせ私も十分なことはできまいけれど、女中が一人欲しいと思っていた際でもあるし、まあ台所や拭き掃除の用事ぐらいはしてもらって、そのあい間に一と通りの教育はさせて上げますが、と、勿論私の境遇だのまだ独身であることなどをすっかり打ち明けて頼んで見ると、「そうしていただければまことに当人も仕合わせでして、……」というような、何だか張合いがなさ過ぎるくらいな挨拶でした。全くこれではナオミの云う通り、会うほどのことはなかったのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだと、私は、その時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいじらしく、哀れに思えてなりませんでした。何でも母親の言葉によると、彼等はナオミを持て扱っていたらしいので、「実はこの児は芸者にするはずでございましたのを、当人の気が進みませんものですから、そういつまでも遊ばせておくわけにも参らず、拠んどころなくカフェエへやっておきましたので」と、そんな口上でしたから、誰かが彼女を引き取って成人させてくれさえすれば、まあともかく

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com